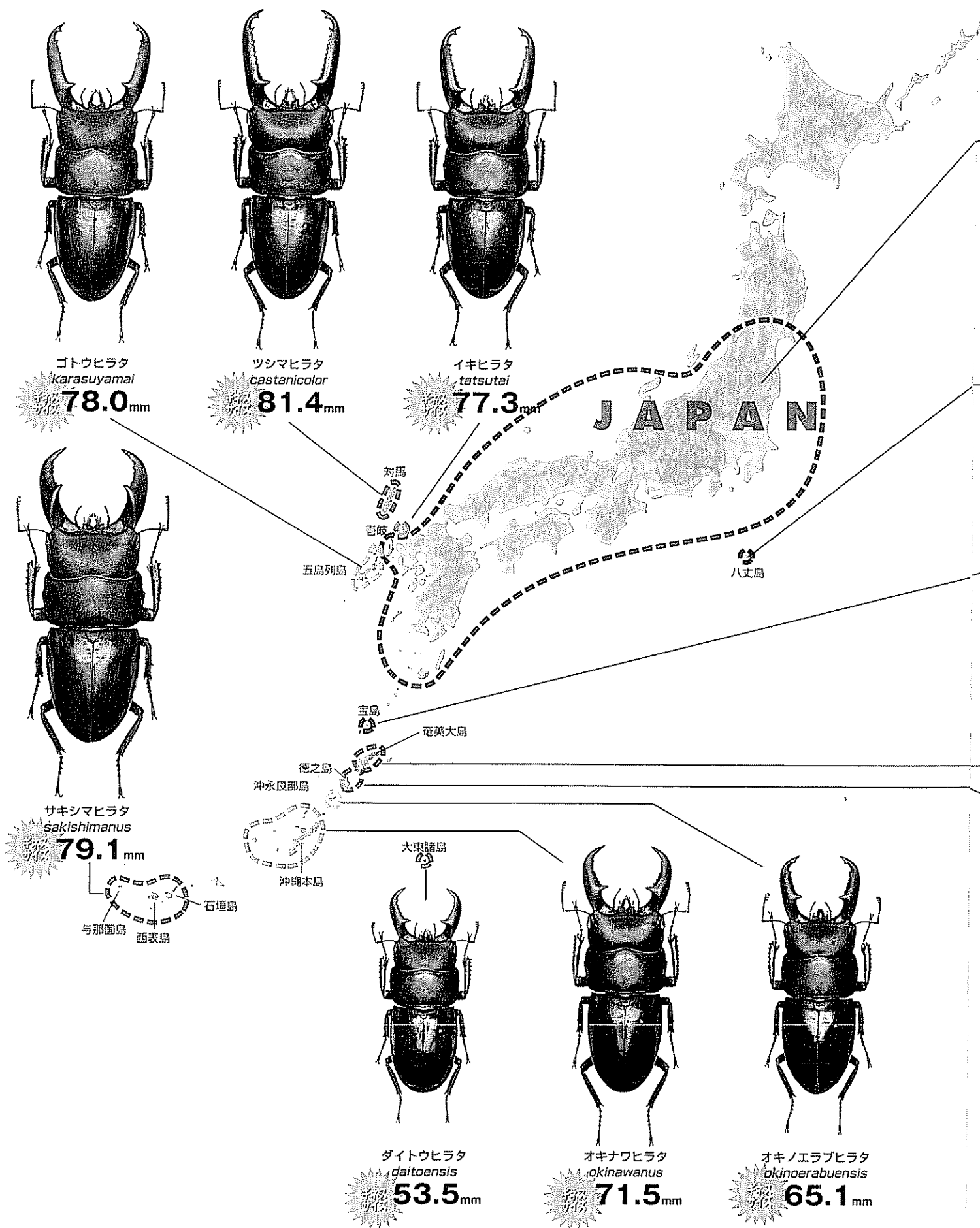


日本の ヒラタクワガタ



日本のヒラタクワガタは、現在12の亜種に分類されている。世界の亜種の合計が17だから、数だけで言えば、世界のヒラタクワガタの亜種の実に2/3が日本にいることになる。これは、いくらなんでも異常なバランスであろう。

この原因は、日本のヒラタがよく調べられている反面、海外のヒラタの変異がまだよく調べられていないことによるものと思われるが、本土に分布する *pilifer* を除くと、他はすべて小さな離島の特産亜種であることも特徴的である。海外では、こんな小さな島のヒラタに名前が付けられていない。

世界のヒラタの分布図を見て、もう1度日本のヒラタを見てみると、ツシマ、ゴトウ、イキの3亜種はお互いに非常によく似ており、朝鮮半島から大陸への関係を強く反映している。奄美大島から八重山諸島にかけて分布しているアマミ、トクノシマ、オキナワ、サキシマの4亜種も、大あごの形はよく似ている。トカラ最南端の宝島にいるタカラヒラタはやや異色な存在で、なぜかもっと大きな他のトカラ列島の島々はヒラタのいない空白地帯となっている。

世界的には、非常に狭い分布域の島のヒラタ連であるが、逆に海外各地のヒラタの標本を集めてみても、ハチジョウ、タカラ、ダイトウ、オキノエラブ、アマミ〜サキシマと同じ特徴を持つ個体群は見つからない。中国やインドシナ半島のクワガタがわかってきた現在、日本本土のクワガタは大陸に近縁のものがいるケースがほとんどだったが、南西諸島の特産種のクワガタは、大陸では見つかっていない。現在の南西諸島が大陸から切り離されたのは、地史的にかなり古い年代なのだろう。

ヒラタ各産地のギネス

従来、ヒラタの亜種別のギネス記録は発表されてきましたが、今回はそれと併せて、細かい産地別のギネス表示をいたしました。p. 8-9、12-13、18-19、24-25、30-31に 印で表示されているものです。これは、今回ピークワ編集部で調査できたサイズですが、同じ亜種（またはグループ）の中でも、地域によって多少の大きさの変異があるようです。